横浜医学，59，33-39（2008）

原　著

大腸癌の術中腹腔洗浄細胞診の有用性

藤井正一[1)]，池　秀之[1)]，大田貢由[1)]，山岸　茂[4)]，
長田俊一[4)]，市川靖史[5)]，國崎主税[1)]，大木繁男[2)]，
野沢昭典[3)]，嶋田　紘[4)]

[1)] 横浜市立大学附属市民総合医療センター 消化器病センター，[2)] 同手術部，[3)] 同病理部，
[4)] 横浜市立大学大学院医学研究科 消化器病態・腫瘍外科学，[5)] 横浜市立大学大学院医学研究科 臨床腫瘍科学

要　旨：目的：大腸癌術後腹膜再発の予知因子として原発巣切除時の腹腔洗浄細胞診（Cy）の有用性を知る．方法：大腸癌298例を対象に切除直前にCyを施行し，臨床病理学的諸因子別の陽性率，腹膜再発率，生存率の比較，Cy(+)例の臨床経過を検討した．結果：全例のCy陽性率は6.0%（18／298例）で腹膜転移（P）陽性例は46.7%（7／15）でP陰性例の3.9%（11／283）に比べ有意に高かった．P陰性例283例で病理学的諸因子を検討するとリンパ節転移，深達度，脈管侵襲陽性が高度であるほど，組織型ではpor/mucにCy(+)率が高い傾向はあるが有意でなかった．肝転移（H）を認めたものでは有意にCy陽性率が高かった．腹膜再発率はCy陽性では9.1%（1／11），Cy陰性では1.1%（3／272）で陽性群に高い傾向はあるが有意差はなかった．大腸癌取り扱い規約に拠る治癒切除であるとされる根治度A，Bが得られた264例では，Cyによる生存率に差はなく，また病理学的諸因子の多変量解析でも生存に寄与する独立因子としてCy陽性は選択されなかった．結論：Cyは腹膜再発の予知因子として有用ではない．

Key words: 大腸癌（Colorectal cancer），腹腔洗浄細胞診（Intraperitoneal lavage cytology），
腹膜再発（Peritoneal recurrence）